

令和5年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 福島県福島市杉妻町2番16号
管理機関名 福島県教育委員会
代表者名 教育長 大沼 博文

令和4年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

- 1 事業の実施期間
令和4年4月1日（契約締結日）～令和5年3月31日
- 2 指定校名・類型
学校名 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
学校長名 郡司 完
類型 グローカル型
- 3 研究開発名
原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成
- 4 研究開発概要
○カリキュラム開発：カリキュラム全体の柱として学校設定科目「地域創造と人間生活」と「未来創造探究（総合的な探究の時間）」で3年間を貫き、地域課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成するとともに地域に貢献する人材としての在り方生き方を涵養するカリキュラムを開発する。
○地域課題解決に貢献する人材育成：地域・世界が直面する困難な課題を理解し、自らの在り方、生き方を考え、また実践を重視した地域課題解決の探究を行い、その解決に貢献できる人材を育成する。
○双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果を創出し、全国へ発信する。
- 5 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無
 - ・学校設定教科・科目 開設している
 - ・教育課程の特例の活用 活用している

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
田熊 美保	経済開発協力機構（OECD） 教育スキル局教育訓練政策課 シニア政策アナリスト	教育政策国際比較、教育政策 評価、Education2030
飯盛 義徳	慶應義塾大学総合政策学部教 授	プラットフォームデザイン、 地域イノベーション
田村 学	國學院大學人間開発学部初等 教育学科教授	総合的な探究の時間の指導、 カリキュラム研究

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（双葉郡浪江町教育委員会教育長、 双葉郡教育復興ビジョン推進協議会及び双葉地区教育長会 代表）	笠井 淳一
福島大学人間発達文化学類特任教授	中田 スウラ
公益社団法人福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム） 専務理事	桜町 道雄
公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構 教育・人材 育成部長	山内 正之
認定NPO法人カタリバ 双葉みらいラボ拠点長	横山 和毅
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校長	郡司 完
福島県教育委員会 教育次長	丹野 純一

8 カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	横山 和毅	NPO法人カタリバ 双葉みらいラボ拠点長	非常勤
海外交流アドバイザー	島田 智里	ニューヨーク市役所公園局都市計 画&GIS スペシャリスト	非常勤
地域協働学習支援員	平山 勉	双葉郡未来会議 代表	非常勤

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
各種事業 の支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
関係機関 との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
運営指導 委員会						○					○	
コンソー シアム						○					○	

(2) 実績の説明

①管理機関における主体的な取組について

- ・教員加配による支援
- ・海外研修費に係る費用の支援
- ・探究活動や外部講師活用に係る費用の支援
- ・運営指導委員会、コンソーシアム協議会の開催
- ・県主催各種発表会や研修会の開催
- ・成果の普及（アクティブラーニングをテーマに研修会を実施し、ふたば未来学園の取組が普及している）

②事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・コンソーシアムの構築
- ・費用面での支援の可能性を検討

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

- ・コンソーシアムについて、要項を作成し、趣旨を共有した。
- ・早稲田大学環境総合研究センターとの連携協定締結（2022年7月16日）

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年「地域創造と人間生活」における地域探究学習、国際理解学習、「総合的な探究の時間」における地域探究学習	3回	4回	3回	4回	2回	4回	6回	3回	2回	4回	3回	1回
2年「総合的な探究の時間」における地域探究学習	3回	4回	3回	4回	2回	4回	4回	3回	2回	4回	3回	1回
3年「総合的な探究の時間」における地域探究学習	3回	4回	3回	4回	2回	4回	4回	4回	2回	4回		
研修（生徒）	1回									2回	1回	3回
発表会、交流会等	1回					1回	1回	1回	1回	3回	1回	1回
研修（教員）	2回	2回	1回			1回		1回	1回	1回	1回	

(2) 実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

○1年「地域創造と人間生活」における地域探究学習、国際理解学習

【前提条件】今年度の1年生（8期生）はふたば未来学園中学校で3年間の学習を行った一貫生と高校に入学してきた高入生が入る初めての学年となる。そのため、一貫生の探究をさらに加速させつつ、これまで通り高入生には丁寧な探究学習の導入を行うなど、学年としての探究指導の一体感を維持しながら両立しがたい課題にチャレンジすることとなった。

- ・地域を知るための導入講座（事前調査、フィールドワーク、振り返り）
- ・地域を深く理解するための演劇創作（双葉郡8町村バスツアー、地域住民へのインタビュー）

- 一、演劇の手法を用いたコミュニケーションワークショップ、地域の対立と分断を構造化したリッチピクチャーの作成)
- ・国際理解講座（イラクが抱える課題事例から国際的な課題を捉える講座、SDGsによる国際的な課題と地域課題との接続）：講師 高遠菜穂子氏
- 1年「総合的な探究の時間」における地域探究学習
- ・地域探究活動への導入講座（「未来創造探究オリエンテーション」）
 - ・探究学習のプロセス（深度）に応じて、「調査グループ」1つと「課題発見グループ」4つの計5チームに分け、プレゼミ方式での指導体制を構築。
 - ・調査アクションの先行事例研究の強化（新聞データベース（朝日けんさくくん、ヨミダスfor スクール）の導入）
- 2年「総合的な探究の時間」における地域探究学習
- ・地域探究活動オリエンテーション（課題の捉え方、課題設定の方法、仮テーマ設定）
 - ・地域探究活動（テーマ設定、ゼミ配属、調査アクション、課題解決アクション）
- 3年「総合的な探究の時間」における地域探究学習
- ・地域探究活動（課題解決アクション）
 - ・論文作成（アブストラクトシートを活用した論文指導ガイダンス、論文ルーブリックを作成し、それに基づく論文指導）
- 海外研修・国内研修（生徒）
- ・ニュージーランド研修：中学校3年生のニュージーランド修学旅行の先遣隊としてブロックハウス・ベイ・インターメディアエット校に派遣。中学校の探究成果である「福島の魅力」を同世代に発信し、異文化交流・ファームステイを行った。（高校1年次8名）
 - ・ドイツ研修：環境先進国であるドイツの持続可能なまちづくりについて学ぶ。また、ダッハウ強制収容所を訪れ、歴史的な教訓伝承の在り方を学び、現地の ErnstMach 校の高校生と意見交換を行った。（高校1年次8名）
 - ・ニューヨーク研修：国際機関（国連本部 DGC）や現地住民（9.11 家族会等）との交流の中で福島を発信するとともに、持続可能な社会づくりを世界で UNIS-UN の学生と対話し、ともに考えた。（高校2年次8名）
 - ・広島研修：広島における原爆被害からの復興と、世界的な平和のシンボルとしての広島を探究するために広島平和記念資料館を見学。また、広島県立広島国泰寺高等学校の生徒との意見交換を行った。（高校1・2年次25名）
- 校内発表会
- ・生徒研究発表会（9月、中学校3年生および高校3年次による地域課題探究発表会、中学校16発表、高校70発表を、コンテスト部門・交流部門にわけて発表会を行った。）
 - ・プレ発表会（10月、2年生によるテーマ設定の報告会、発表）
- 校外の各種発表会、交流会への参加等（令和4年度実績：計55件）
- ・マイプロ校内選考会（11月、1～3年による学年横断型の地域課題探究発表会、14発表のうち福島県サミット出場11件、予備サミットに2件出場）
 - ・演劇を通して地域の課題を知る学習成果発表会（12月、20グループ発表）
 - ・ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト（10月、福島県内高校生対象の発表会、本校から4件応募、最優秀賞1本、優秀賞1本、社会貢献賞2本）
 - ・ふくしま学（楽）会（8月および1月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から3発表）

- ・第22回福島県総合学科高等学校生徒研究発表会（1月、本校から3件発表）
- ・マイプロジェクトアワード福島県 summit（1月、福島県内高校生対象の発表会、本校から11件応募、このうち1件が福島県代表として全国 summit へ進出）
- ・マイプロジェクトアワード全国 summit（3月、福島県代表として1発表）

○研修（教員）…本校では「未来研究会」と呼称

- ・地域を理解するためのバスツアー（4月：着任者オリエンテーションとして実施）、「グローバル型」最終年度研究成果発表会にむけての目線合わせ、探究学習における教員の役割と働きかけのケーススタディ研修などを行った。（企画・研究開発主催で3回実施）

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

- ・「地域創造と人間生活」（1年全員対象、2単位で実施、1単位は1年次前半に、残りの1単位は演劇作成を夏休みなどに集中的に実施）
- ・「総合的な探究の時間」（本校では「未来創造探究」として実施）（1年全員対象：1単位で後半に実施、2・3年全員対象：各学年3単位 合計6単位で実施）

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

- ・令和元年度までのSGH指定期間ではクロス・カリキュラムによる教科横断的な授業の開発を行ってきたが、「グローバル型」指定期は年間計画の中で教科横断的な学習を取り入れることができなかった。次年度から「未来創造探究」のゼミ編制を学術分野に応じた6つのゼミ編制に変更するため、教科横断的な学習の重要性が再認識されるようになってきた。次年度以降の課題として、取り組んでいきたい。

④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

- ・本校では「変革者」の育成を教育目標とし、これを実現するために「自立・協働・創造」の力の育成を掲げている。これらの力を育成する要件として11項5段階のルーブリックを策定し（昨年度に10項目から11項目にルーブリックを改定）、これに基づきカリキュラム・マネジメントを行っている。教育活動の柱として探究活動（「地域創造と人間生活」「総合的な探究の時間」）を推進し、その主要なテーマとして地域課題を取り上げている。そのため、地域との協働による探究的な学びは本校の教育目標を実現する中心的な役割を担う位置付けとしている。

⑤学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

- ・校務分掌として「企画・研究開発部」を設置し、探究活動や教員研修の企画立案、運営を行った。構成要員として専属6名の他に中高の各学年担任も加わっており、全教員の15%ほどを占めている。また、学校内に常駐しているNPO法人カタリバのスタッフにも探究ゼミの運営やカリキュラム開発のための会議等に参加していただいている。
- ・1年生の活動（探究活動の導入）は、1学年担任と企画・研究開発部の担当者によるチームで指導した。2・3年生の活動（探究活動の実践）は6つのゼミに分かれて実施した。各ゼミは各学年の担任、教科担当者、地域コーディネーター（カタリバスタッフ）からなる3～4名程度の教員チームが担当し、生徒の指導にあたる仕組みを構築した。これによ

りほぼ全ての教員が探究活動に関わった。

- ・探究学習における教員の役割と関わり方についての校内研修を行い、4つの役割/ロール（ティーチャー/インストラクター、ファシリテーター/コーディネーター、ジェネレーター、メンター）と23の関わり方を整理することができた。
- ・「探究による実践的な学び」と「大学段階での専門的な学び」を更に強化するために、早稲田大学の高大リエゾンマネージャー（学校常駐）に生徒と専門家のコーディネートや参考文献リストの作成等にご協力いただいた。

⑥カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及びの学校内における位置付けについて

- ・カリキュラム開発等専門家については毎週実施の本校の企画・研究開発部の定例ミーティングに出席していただいた。「地域創造と人間生活」、「総合的な探究の時間（未来創造探究）」の企画立案、探究指導のための担当教員ミーティングの企画立案、生徒の指導方法、教員と生徒との関わり方、評価の在り方の検討、学校内外の発表会の検討、先進校の状況の共有等について協議いただいた。
- ・海外交流アドバイザーについては、今年度から海外研修を復活させるため、海外情勢の情報収集やニューヨーク研修の調整に尽力いただいた。
- ・地域協働学習実施支援員については、地域を知るためのバスツアー、演劇、課題研究実践についての協議、地域を熟知している講師の選定や事前授業について相談させていただいた。また、実践の場の提供、活動の地域への周知、地域の協力者の紹介等、生徒が地域に踏み込みやすい環境作りにも協力いただき、地域と本校の強力な仲介役を担っていただいた。さらに自ら地域の案内役や発表会の審査員として、多くの取組にご協力いただいた。

⑦学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

- ・研究開発の進捗については、以下のような教員チームによるミーティング等の機会を活用して情報共有、評価、改善策の検討を行った。
 - 職員会議（月に一度）
 - 企画・研究開発部（15名程度）による定例ミーティング（週に一度）
 - 各学年の探究担当者（各学年20名程度）による月次会（2か月に一度）
 - 2、3年の各ゼミ担当者（各3名程度）による定例ミーティング（週に一度）
- ・生徒の資質能力の状況については、年に2回ルーブリック評価を行い、その動向について企画・研究開発部が集約、分析を行い、探究担当者との共有、対策検討等を行った。
- ・生徒一人ひとりに対しては、ルーブリック評価をもとに、2年生以降は各ゼミ内での生徒同士によるピアレビューや担当教員との面談（ルーブリック面談）を行い、生徒自身の活動の振り返りや目標設定の契機となった。

⑧カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

- ・コンソーシアム協議会において本校のカリキュラム開発について説明し、理解を得た。カリキュラムに対しては、探究活動の課題設定段階における工夫や、普通に生活している地域の方の声を探究活動に取り入れるような活動に向かう大きな方向性について意見をいただいた。

⑨運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

- ・ふたば未来学園は「探究のトップランナー」として走り続けるが、「ふたば未来学園だからできる」ではなく「他の学校でもできること」の要素を抽出してどのようにノウハウを共有するかが課題。
- ・目標とする指標を設定することは難しいが、その難しさを感じるのはふたば未来学園がトップランナーであるから、その難しさをどうクリアするかを考えるには、指標を構成する要素を分解して考える必要がある。

⑩類型毎の趣旨に応じた取組について

- ・本校は類型として「グローバル型」の指定を受けており、地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルの構築等を目標としている。地域探究活動で捉えた課題や知見をグローバルな課題と照らし合わせる機会として海外研修を行った。令和2・3年度には海外研修を実施することができなかったが、オンライン交流や日本に來ている海外からの留学生の双葉郡ツアーを企画するなど、できる最大限の学習活動につなげてきた。2年間の代替研修を経て、語学研修などオンラインでもある程度効果を得た学習もあったが、生徒が直接海外で学ぶ体験は教員の想像以上の学習の成果があることがわかった。そのため、オンラインと対面の研修の良さを組み合わせて海外研修プログラムを設計する必要がある。
- ・本校は平成30年度からアジア高校生架け橋プロジェクト留学生を受入れており、今年度はフィリピンとインドネシアから2名の留学生がいる。留学生の視点を生かした授業や校外活動を英語教員や学年教員が積極的に行っている。

⑪成果の普及方法・実績について

- ・活動の様子等については本校のホームページやSNSにおける公表、マスコミへの周知と各種メディアへの掲載、視察者への説明等を行い、成果の普及に努めた。
- ・生徒の課題探究活動の成果については、学校内外の発表会により普及に努めた。今年度はコロナ禍により生徒研究発表会は保護者のみ公開とした。
- ・今年度は「グローバル型」最終年度のため、2月に研究成果発表会を実施した。全国各地から150名の申し込みがあり、計138名の参加者に成果報告を行った。

<分科会テーマ>

- 第1分科会 総合的な探究の時間の指導法と評価～探究プロセスとルーブリック～
- 第2分科会 総合的な探究の時間での協働～地域協働・外部連携～
- 第3分科会 グローバル教育～海外研修・英語力向上～
- 第4分科会 シティズンシップ・コミュニケーション・演劇教育～コミュニケーション教育～
- 第5分科会 伴走する先生を支える主体的・対話的で深い学び～教員エージェンシーと指導力向上～

1.1 目標の進捗状況、成果、評価

本事業の目的は以下のとおりである。

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、自己の在り方生き方を見出すカリキュラムの開発
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成

C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及
上記A～Cを実現するために設定した目標と進捗状況を以下に示す。

(目的Aの目標) 総合学科の入学年次必修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活(令和3年度より)」に代替し、困難な地域社会の現状とSociety5.0時代の変化を踏まえた能力と態度を養い自己の在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。

【今年度の結果】: 昨年度立案した計画に基づき、中高6年間を見据えた年間計画のもと「地域創造と人間生活」及び「未来創造探究」を実施した。

・今年度の1年生は一貫生で哲学対話や演劇を経験した生徒と高入生でスキルの差が例年以上に大きいという課題があったため、入学時よりコミュニケーションワークショップ(以下、「WS」)を多めに行った。様々な価値観や背景を持つ人の集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成できたほか、一貫生が高入生を巻きこみながらうまくリードしていく姿が見られ、結果としては教員の懸念は杞憂に終わった。次年度はWSの時間を減らし、哲学対話などより深い学習のための時間に充てることを検討する。

・地域の課題を知るフィールドワークに始まり、地域の方々の取材を通して地域の分断と対立の社会的構造を演劇で表現し、そこで明らかになった社会的構造を1年次後半から実施の「未来創造探究」につなげる活動を今年度は強化した。フィールドワークで浮き彫りになった取材者の対立と分断の状況について、個人的な背景だけではなく、社会の構造として理解するために「リッチピクチャー」を作成した。これによって、福島が抱える課題とそれにより分断と対立の構造で苦しむ取材者の背景を浮き彫りにすることで、探究学習における課題発見との連続性を強化することができた。

(目的Aの目標) 地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。

【今年度の結果】: 以下のような取組を行った。

・昨年に引き続き、イラク在住の高遠氏にお越しいただき、国際理解講座を行った。「中東、イラク、イスラム、難民」に対するイメージと実際のギャップを、「フクシマ」に対する世界のイメージと実際のギャップと重ねて考えることができた。また講演者の生き方を通して生徒達自身の在り方生き方を考える機会となった。(1年)

・ドイツ研修を実施した。ドイツ研修に参加するにあたり、ドイツの童話作家ケストナーの『どうぶつ会議』の輪読や「どうぶつかいぎ」展の見学、この内容についての哲学対話などを行った。これらの学習は、教訓をどのように後世に語り継ぐかを考える上で極めて重要なものとなり、ドイツの高校生と教訓の伝承についてディスカッションを行った。教員が海外研修でのプログラムを計画するのではなく、生徒が主体的に研修プログラムを作り上げる「プロジェクト型海外研修」の型を作り上げることができた。(1年)

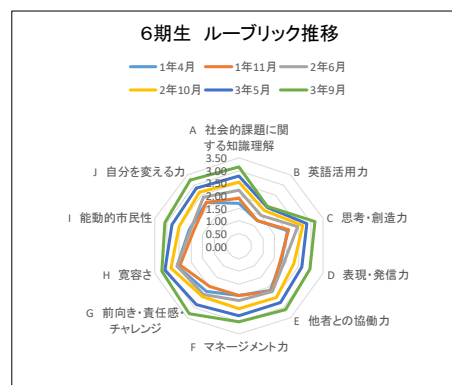
・ニューヨーク研修については、国連国際学校が主催する生徒国際会議(UNIS-UN)に参加し、各国の同世代や各国大使・専門家等とグローバルな課題について意見交換を行った。(2年)

(目的Bの目標) 育成したい具体的な知識・スキル・人間性等を規定したルーブリックについて、3年生最後のルーブリックレベル平均値で3.5以上を実現する。

【今年度の結果】: 今年度の3年生について、以下にルーブリックの推移データ(平均値)、グラフを示す。これまでの生徒と同様、それぞれの項目について学年が上がるごとに値が上がっており、2年次後半から3年次後半にかけて資質・能力が順調に高まったといえる。しかし最後のA

アンケートの平均値は 3.03 となり、目標として掲げている 3.5 には到達していない状況である。

6期生	1年4月	1年11月	2年6月	2年10月	3年5月	3年9月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.69	1.89	2.24	2.54	2.80	3.17	
B 英語活用力	1.23	1.27	1.49	1.75	1.91	1.95	
C 思考・創造力	2.05	2.07	2.45	2.67	2.85	3.18	
D 表現・発信力	1.78	1.72	1.92	2.29	2.63	2.94	
E 他者との協働力	2.15	2.20	2.23	2.51	2.79	3.14	
F マネージメント力	1.96	1.98	2.15	2.49	2.77	3.01	
G 前向き・責任感・チャレンジ	2.20	1.99	2.39	2.45	2.87	3.31	
H 寛容さ	2.58	2.44	2.58	2.84	3.08	3.22	
I 能動的市民性	2.07	1.89	2.02	2.48	2.80	3.08	
J 自分を変える力	2.16	2.16	2.42	2.67	2.85	3.26	
平均	1.99	1.96	2.19	2.47	2.73	3.03	



卒業生ごとの経年比較

1期生 (H29年度卒)	2期生 (H30年度卒)	3期生 (R元年度卒)	4期生 (R2年度卒)	5期生 (R3年度卒)	6期生 (R4年度卒)
1.99	2.63	3.10	2.62	2.90	3.03

(目的Bの目標) 地域社会への還流を見据え、地域に貢献していく在り方生き方の目標として「卒業時における、将来的な地域への貢献意識(社会との関わり)や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」を達成する。

【今年度の結果】：目標未達成

問1 未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？ 回答結果：肯定的意見 63%、否定的意見 37% (昨年：肯定的意見 87%)

問2 未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？

回答結果：肯定的意見 64%、否定的意見 36% (昨年：肯定的意見 87%)

昨年まで、90%近くの高水準であったが、今年度は急落した。今年度の卒業生は高校入学時より3年間コロナ禍であり、探究学習や海外研修などの教育活動に大きく制限がかかっていたことが原因と推察できる。しかし、ルーブリックの項目の中でC思考・判断力とJ自分を変える力は過去の学年の中でも最も高い数値となっており、コロナ禍であっても試行錯誤を繰り返して粘り強く探究に取り組んだことが多かったと考えられる。

(目的Cの目標) 地域と協働した課題探究プロジェクト数、協働する地域の方の人数、来校する教育関係者等の人数、発表・コンテスト応募件数等について目標値を達成する。

- ・地域と協働した課題探究プロジェクト(目標：最終年度50件)

今年度実績：69件 … 目標達成

- ・協働する地域の方(延べ)(目標：最終年度200件)

今年度実績：321件 … 目標達成

- ・来校する教育関係者等(目標：最終年度250件)

今年度実績：376人(グローバル型研究成果発表会参加者128人含む) … 目標達成

- ・発表・コンテスト応募件数(目標：最終年度50件)

今年度実績：55件 … 目標達成

(目的Cの目標) 地域復興・創生における高校の役割と、「教育と復興の相乗効果創出」の必要性を踏まえ、双葉郡8町村との広域的・組織的・実働的な協働体制をコンソーシアムで確立し8

町村を面的にカバーするとともに、地域協働の場・機会として校舎や探究発表会を活用し、生徒の探究を通じて地域住民主体のウェルビーイング実現を後押しする。

【今年度の結果】：以下のような取組を行った。

・生徒の探究活動については、双葉郡全8町村に活動を広げることができた。また、昨年よりも多様な地域の方々と協働ができた。地域との協働について、今年度は次のような事例がみられた。

- ① 富岡町「YONOMORI DENIM」：ファッションに関心のある生徒が夜の森デニムさんと協働し、デニムを活用したアップサイクルについて探究を行う。
- ② 葛尾村「愛について」：愛とは何かを探究する生徒が葛尾村の祝言式をきっかけとして、葛尾村の住民から聞き取り調査を行っている。
- ③ いわき市「神社の祭りを通じて、地域のつながりを作りたい」：自分の身近な地域の神社の祭りを復活させるために、他地域の祭りとの比較について調査する探究を行う。

教育と地域復興の相乗効果を具現化している好例が少しずつ増えている。今後もこのような事例を積み重ねることにより目標達成に向けて取り組みたい。

<添付資料>目標設定シート

1 2 次年度以降の課題及び改善点

① さらなる探究の高度化（令和5年度からWWL事業を展開する）

これまでの探究学習では、地域を巻きこんだ課題解決アクションについては一定の蓄積ができた。しかし、理系探究の指導や調査アクションのうち、先行事例の研究方法についてはまだ課題がある。そのため、探究を更に高度化させるためにより文理融合したグローバル・イシューや高度な学問分野との接続の強化を目標とする。特に東北大学や早稲田大学との連携を強化し、アドバンストプレイメント(AP)の実施や大学の内容の先取り履修の体制をめざす。

② 教科横断的な学習と総合探究、教科と探究の往還関係の構築

文理融合したグローバル・イシューに取り組むために、これまでに行ってきた偶発的なクロス・カリキュラムではなく教育課程に位置づけた教科横断的なカリキュラムデザインを行う。また、それにむけての研究・開発を行う。

③ 地域復興と教育の相乗効果を生み出す探究学習

地域との協働による探究学習を通じて生徒の資質・能力が向上しているが、探究学習が地域の方々の Well-being を向上させているかどうかについては、それを調査する指標を含めて、評価の在り方から研究をする必要がある。

④ 全校で探究学習を伴走するための校内研修の充実

コロナ対応に伴うオンライン授業への対応（令和2年度）や「多忙化解消に伴う校内研修時間の削減」（令和3年度）、アカデミック系列の週36単位に伴う授業時間の確保（令和4年度）が校内研修の時間削減の要因となった。職員研修の実施形態について、一斉参集での研修ではなく、小さな会議体を組み合わせることで職員研修の機能をカバーしてきた。しかし、理念の共有などについては教員研修で現場の知を持ち寄って議論することが必要である。

【担当者】

担当課	高校教育課	TEL	024-521-7773
氏名	赤岡奈津美	FAX	024-521-7973
職名	指導主事	e-mail	akaoka.natsumi@fcs.ed.jp